

臨床レポート

雄フェレット 2 例の前立腺膿胞に起因した尿閉に対する治療

佐々木幸彦 佐々木正子

要約

副腎疾患に合併したと考えられる前立腺膿胞による重度の排尿障害がみられた2例について、会陰尿道瘻形成術を施し尿路を確保したところ、自力排尿が出来るまでに改善された。

キーワード：フェレット，副腎疾患，前立腺膿胞，尿閉，会陰尿道瘻形成術

フェレットの副腎疾患は、背部から尾部にかけての脱毛や掻痒，オスでは前立腺疾患，メスでは外陰部の腫脹などが症状として認められる。血中エストラジオール値，デヒドロエピアンドロステロン値，アンドロステジオン値， 17α -ヒドロキシプロジェステロン値などのいずれかに異常が認められた場合，副腎腫瘍もしくは過形成が疑われる。今回，合併症で前立腺膿胞による重度の排尿障害がみられた2例について報告する。

症例

症例①：オス，5歳，体重1,200g（去勢，臭腺摘出済み）

主訴：1週間前から頻尿および努力性排尿。尿がまったくでず，食欲もなくなったため来院した。脱毛および掻痒は認められなかった。

臨床検査所見：穿刺尿(膿尿)検査では，比重1.16，蛋白++，潜血++，pH 5であった。血液検査では，BUN>140mg/ml，CREA4.3mg/ml，IP>15.0mg/mlであった。前立腺膿胞によると思われる腹部膨大がみられ（写真），X線検査でも

前立腺腫大が確認された。

治療および経過：粘度が高い膿で尿道が閉塞し，3Frの栄養カテーテル挿入が困難であった。静脈を確保し，乳酸加リンゲルを輸液しながら，イソフルランで導入，維持麻酔を行なった。会陰尿道瘻形成術を実施し尿路を確保した。全身の状態が悪かったため，膀胱洗浄し，前立腺を穿刺して前立腺膿胞の膿汁を吸引，洗浄した。静脈輸液は腎機能回復のため継続し，抗生剤，消炎剤，利尿剤などを投薬した。術後は，新たに形成した尿道口から排尿が可能になった。翌日から食欲が出てきて，自力排尿も確認できた。



写真（前立腺膿胞による膨大）

6日後腎機能も正常になったため退院とした。膿汁から *Enterococcus faecalis* が検出され、感受性検査でABPC, AMPC, CVA, CPなどに感受性が認められた。2週間後の再診時には排尿良好で、手術時にピンポン玉大であった前立腺は梅干し大まで縮小していた。

症例②：オス，7歳，体重1,080 g（去勢，臭腺摘出済み）

主訴：数日前から頻尿となり，前日から排尿困難となった。食欲もなく痩せてきた。搔痒を伴う脱毛は1年以上前から認められた。

臨床検査所見：穿刺尿(膿尿)検査では，比重1.025，pH 5，蛋白++，潜血++，沈査には細菌，赤血球および白血球が多数認められた。ALT239U/lであった。

治療および経過：脱水が重度で，栄養状態もかなり悪かったため，症例①同様，開腹はせずに会陰尿道瘻形成術と前立腺膿胞の膿汁の吸引と洗浄を行った。抗生剤，強肝剤，利尿剤，静脈輸液を行った。膿汁からは，*Streptococcus spp.* が検出されて，ほとんどの抗生剤に感受性が認められた。術後には，自力排尿が認められ，翌日から食欲も出てきた。3日後に退院とした。

術後の管理：フェレットはエリザベスカラーを装着しても体が柔軟であるため，尿道カテーテルは留置せず，点滴ラインははずれるまでの間留置した。縫合はPDS5-0を使用した。

両症例ともに術後にホルモン濃度を測定した。それぞれエストラジオールの上昇が認められた。

予 後

症例①：飼主は脱毛などの症状もなかったため副腎に対する外科治療を望まなかった。前立腺膿胞の治療のため抗生剤，消炎剤を継続した。副腎の治療には，酢酸リユープロレリン250 μ gを1カ月ごとに2回投薬した。前立腺症状が改善されたため，指示通り来院しなくなり10カ月ほど治療が中断した。再来院した時には，前立腺の腫大が認められ，3日前から食欲元気がなかった。脱水が重度であり，低体温のため入院

し翌日に死亡した。

症例②：飼主は動物が高齢であるため内科治療を希望した。抗生剤，消炎剤のほか酢酸リユープロレリン250 μ gを1カ月ごとに4回投薬した。発毛が認められ搔痒感もなくなった。その後8カ月治療が中断し再来院した時には，前立腺腫大と腎不全の状態になっており，飼い主は積極的な治療を希望せず，翌日死亡した。

両症例とも，会陰尿道瘻形成術後は尿閉になることはなかった。尿中に膿塊が混じり出にくくなることはあったが，膿汁が減るにつれスムーズに排尿できるようになりしほりもみられなくなった。フェレットの陰茎は包皮よりうまく露出できず，特殊な形をしているため尿道口が分かりにくい。もし尿閉になっても，新たに形成した尿道口からはカテーテルが容易に挿入できるため治療効果はあったと考えられる。飼主は一般状態が良くなると病院から足が遠のいてしまったため，副腎の継続治療の必要性を理解していただく必要があった。また，本来であればホルモンの測定を治療前後で行うべきであったが，検査代が高額であるため希望されなかった。

ま と め

今回のフェレットの尿閉に対する治療を通して以下の事が注意点としてあげられる。

- ・フェレットの雄で副腎疾患が疑われた場合，前立腺の大きさに注意する。
- ・抗生剤を選択する際，細菌培養感受性検査は必須であるが，耐性を獲得しやすいとされるので定期的に検査をする必要がある。
- ・内科治療や抗生剤を投与しても進行することがあるため継続的に観察する。
- ・前立腺疾患は持続的なホルモン刺激に起因するため，初期に副腎を切除できれば良い経過が得られることがある。しかし今回のケースのように大きく変性している場合，副腎の切除のみでは改善は困難で，前立腺膿胞の外科的処置が望ましい。